



日本学士院ニュースレター

2024. 4 No. 33



第20回日本学士院学術奨励賞授賞式の挙行（賞状及び賞牌を授与される受賞者（片岡圭亮氏））

令和6年3月7日、秋篠宮皇嗣同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、明治記念館において第20回日本学術振興会賞並びに日本学士院学術奨励賞授賞式が挙行されました。（関連記事5ページ参照）

目次

令和6年度日本学士院賞	2	会員寄稿（柏原正樹会員）	13
第20回日本学士院学術奨励賞	5	会員寄稿（佐藤彰一会員）	14
新会員選定	9	会員・客員の逝去	16
新客員選定	10	会員の近刊紹介	16
講演会レポート	11	訂正	16
会員寄稿（松浦 純会員）	12	編集後記	16

令和6年度日本学士院賞

令和6年3月12日開催の第1177回総会において、日本学士院賞9件10名（うち菊地重仁氏と小原一成氏に恩賜賞を重ねて授与）を決定しました。第114回となる授賞式は6～7月に举行される予定です。（所属は授賞決定時）

恩賜賞・日本学士院賞

Herrschaft, Delegation und Kommunikation in der Karolingerzeit. Untersuchungen zu den Missi dominici (751–888) (『カロリング朝時代の支配、委任、コミュニケーション—ミッシ・ドミニキ(751–888年)の研究』)



菊地 重仁(きくち しげと)

東京大学大学院人文社会系研究科准教授



カロリング朝フランク王国の国王使節を担った人物について悉皆的史料調査を行い、400人以上のプロソポグラフィ（人物誌）構築に成功し、この研究テーマを国際的に新たな段階に引き上げた。

Herrschaft, Delegation und Kommunikation in der Karolingerzeit. Untersuchungen zu den Missi dominici(751–888) (Harrassowitz, 2021)

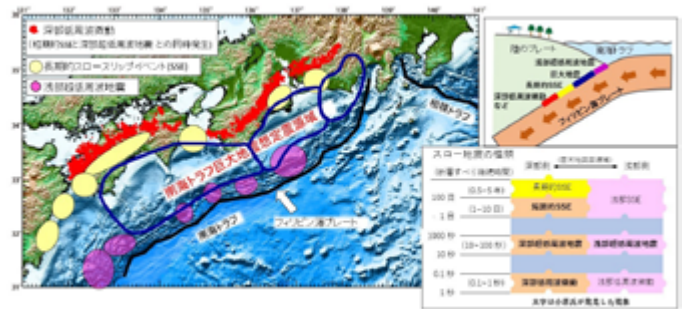
恩賜賞・日本学士院賞

「プレート境界における深部低周波微動の発見とスロー地震学への発展」



小原 一成(おぼら かずしげ)

東京大学地震研究所教授



深部低周波微動と呼ばれるプレート境界の滑り現象の発見を皮切りに、複数タイプのゆっくりとした滑り現象を発見し、それらが同時発生する特徴を見出すなど、スロー地震学の開拓に大きく貢献した。

日本学士院賞

『太宰治論』

安藤 宏(あんど う ひろし)

東京大学大学院人文社会系研究科教授



太宰 治の小説の表現と構造について、伝記的な研究を基礎に、素材やテーマ、文体や「語り」の特徴などを取り上げ、従来の太宰研究を総括しつつ、広い視野のもと精緻な分析を新たに積み重ねた画期的な研究になっており、広く日本近代文学の解明にも資する優れた業績である。

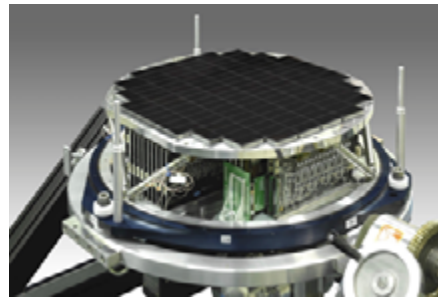
『太宰治論』(東京大学出版会、2021年12月)

日本学士院賞

「重力レンズ効果を用いた宇宙論研究の開拓推進」(共同研究)

宮崎 聡 (みやざき さとし)

国立天文台ハワイ観測所長、国立天文台先端技術センター教授



116枚のCCDを敷き詰めたすばる望遠鏡超広視野カメラの撮像部

大栗 真宗 (おおぐり まさむね)

千葉大学先進科学センター教授



銀河の重力レンズ効果でその背後からの光は曲げられて地球に届く

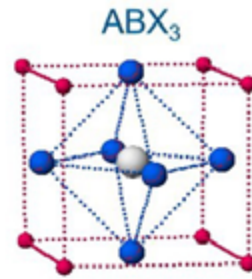
すばる望遠鏡の超広視野カメラを開発して大規模な観測計画を主導し、重力レンズ効果を用いた暗黒物質分布の解明や宇宙論研究における重力レンズ効果の新たな応用法を具体的に提示し、数々の発見をもたらした。

日本学士院賞

「感光性ペロブスカイト結晶を用いる有機無機ハイブリッド太陽電池の創成」

宮坂 力 (みやさか つとむ)

桐蔭横浜大学医用工学部特任教授、東京大学先端科学技術研究センターフェロー



ペロブスカイト結晶構造

プラスチックフィルムに塗って軽量で曲げることができ、高い効率で太陽光を電気に変えるペロブスカイト太陽電池を発明した。比較的弱い光でも発電できるため、従来の太陽電池では使えなかった曇り空や電灯下の室内でも使える特徴がある。

チタン酸カルシウム

有機・無機ハロゲン化ペロブスカイト

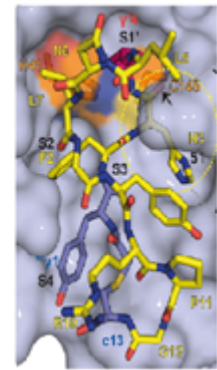
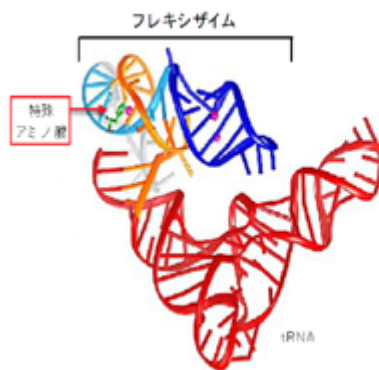
- Aサイト: Ca^{2+} Cs^+ , $CH_3NH_3^+$ など
- Bサイト: Ti^{4+} Pb^{2+} または Sn^{2+}
- Xサイト: O_2^- I^- , Br^- , Cl^- など

日本学士院賞

「特殊ペプチド創薬の開拓への貢献」

菅 裕明 (すが ひろあき)

東京大学大学院理学系研究科教授、東京大学先端科学技術研究センター教授



疾患原因となる標的タンパク質に強く結合する薬剤の効果的探索を可能にする「フレキシザイム」、「環状特殊ペプチドの無細胞翻訳合成」、「RaPIDプラットフォーム」技術を開発し、「特殊ペプチド創薬」の新分野を開拓した。

(左) フレキシザイムがtRNAと特殊アミノ酸に結合した3次元構造 (Nature 2008)

(右) コロナウィルスのプロテアーゼ酵素にした環状特殊ペプチドの3次元構造 (Nature 2023)

日本学士院賞

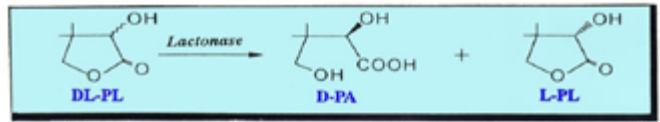
「微生物の新規機能の探索と有用物質生産への応用に関する研究」

清水 昌 (しみず さかゆ)

京都大学名誉教授、富山県立大学客員教授



微生物の新規な機能を発見する研究から、「油脂発酵」という産業分野を確立し、また微生物酵素を用いた光学活性化合物の工業的生産法を構築するなど、微生物を用いたバイオ産業の発展に大きく貢献した。



パントテン酸合成の中間体であるパントラクトンの光学分割。本研究で見出されたラクトナーゼでD L -パントラクトン (DL-PL) を処理すると、D -パント酸 (D-PA) とL -パントラクトン (L-PL) を与える。

日本学士院賞

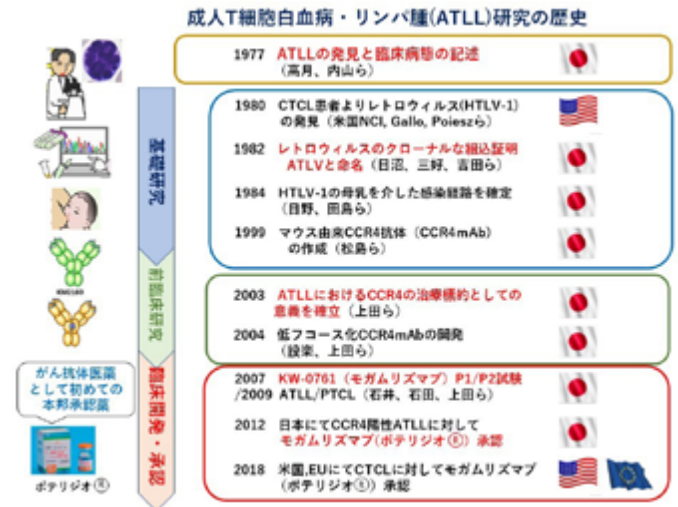
「成人T細胞白血病・リンパ腫に対する抗体医薬開発のトランスレーショナル・リサーチ」

上田 龍三 (うえだ りゅうぞう)

名古屋大学大学院医学系研究科特任教授、名古屋市立大学名誉教授、愛知医科大学名誉教授



成人T細胞白血病・リンパ腫 (ATLL) に対する画期的な日本初の抗がん抗体医薬の開発研究に成功したのみならず、長年に亘り、がんの基礎研究成果を臨床に導入する「がんトランスレーショナル・リサーチ (TR)」の発展に多大な貢献をした。



病態解明から治療薬開発まで日本が世界のATLL研究をリード

日本学士院賞

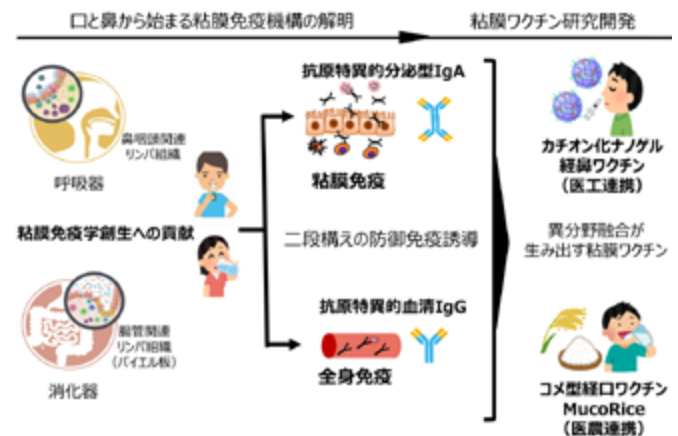
「齶蝕 (うしょく) ワクチンの研究から始まった粘膜免疫学の創生と経口・経鼻ワクチンの開発」

清野 宏 (きよの ひろし)

千葉大学未来医療教育研究機構・医学部附属病院ヒト粘膜ワクチン学部門卓越教授、千葉大学未来粘膜ワクチン研究開発シナジー拠点長、千葉大学災害治療学研究所感染症ワクチン開発研究部門長、米国カリフォルニア大学サンディエゴ校医学部特任教授、東京大学名誉教授



齶蝕ワクチンの研究を原点として、腸管と呼吸器の粘膜免疫機構の解明を先導し、粘膜免疫学の創生に貢献した。更に、その研究成果に立脚した経口・経鼻ワクチンに代表される粘膜ワクチンの開発でも独創的な研究成果を挙げた。



抗原を経口・経鼻投与することで、粘膜免疫と全身免疫の両方を活性化し、抗原特異的分泌型IgAと血清IgG抗体が誘導でき、二段構えの防御免疫が成立する。その研究成果に立脚し、異分野融合研究開発を先導し、コメ型経口ワクチン MucoRice とカチオン化ナノゲル経鼻ワクチンに代表される粘膜ワクチンの開発を進めてきた。

第20回日本学士院学術奨励賞

令和6年1月12日開催の第1175回総会において、第20回日本学士院学術奨励賞の受賞者6名を決定しました。3月7日には秋篠宮皇嗣同妃両殿下ご臨席のもと、明治記念館において日本学術振興会賞と同時に授賞式を挙行了しました。(所属は授賞決定時)



「接触幾何学、シンプレクティック幾何学とストリングトポロジーの研究」

入江 慶 (いりえ けい)
京都大学数理解析研究所准教授

スメイリングによる数学の18大問題の一つとして知られてきた閉補題を、ハミルトン力学系の周期解の場合に、2次元・3次元でゲージ理論を応用する画期的な手法で初めて証明した。他にストリングトポロジーに関する秀でた研究もあり、高く評価されている。



「フィリピン・インドネシアのオーストロネシア諸語を中心とした言語類型論」

長屋 尚典 (ながや なおのり)
東京大学大学院人文社会系研究科准教授

フィリピン・インドネシアのオーストロネシア語族の言語類型論において、多彩な研究手法を駆使した業績を示し、学界に対し強いインパクトを与え、持続可能な開発目標 (SDGs) の達成のための重要な要素を提供した。



「一電子移動を誘起する有機触媒の開発とラジカル共有結合形成反応の精密制御」

大宮 寛久 (おおみや ひろひさ)
京都大学化学研究所教授

有機分子の合成方法として、酵素・金属に継ぐ第三の触媒として注目されている有機触媒を用いて、ラジカル反応の制御法、反応設計指針を示し、適用範囲を拡大することにより、実用的な有機合成反応技術に発展させた。



「植物の種間および種内生殖障壁の分子機構に関する研究」

藤井 壮太 (ふじい そうた)
東京大学大学院農学生命科学研究科准教授

植物の有性生殖における生殖隔離に与る雌性因子の発見をはじめ、優れた研究成果を挙げている。今後の異分野融合による研究は、作物の育種のみならず、生物の進化の理解に資するものとして進展が期待される。



「先端ゲノム技術を用いた発がんの分子遺伝学的基盤の解明」

片岡 圭亮 (かたおか けいすけ)
慶應義塾大学医学部教授、国立がん研究センター研究所分野長

成人T細胞白血病リンパ腫などの悪性腫瘍における遺伝子異常に基づく病態を解析し、PD-L1異常やがん遺伝子の複数変異を発見した。これらの研究成果は生物学的に重要であるとともに、臨床応用への展開が期待される。



「制度設計と情報設計の理論およびオークションや市場・組織分析への応用」

山下 拓朗 (やました たくろう)
大阪大学大学院国際公共政策研究科教授

メカニズム・デザイン理論で優れた研究を行ってきた。氏が開発に貢献してきた複数の競争的プリンシパル間のゲームは、経済主体が自らの活動する国を選ぶ世界での税制や移民政策の分析などを可能にした点で高く評価できる。

「力学と幾何学」

京都大学数理解析研究所准教授 入江 慶

授賞題目にあるシンプレクティック幾何学という分野はいくつかの面を持つが、そのひとつは「古典力学の幾何学化」である。古典力学では、例えばコマやビリヤード球や天体の運動を研究する。これは数学的には、運動方程式という微分方程式を解くことに帰着する。例えば2つの天体の運動（2体問題）なら運動方程式は代数的に解くことができ、一定の条件を満たす解はすべて周期軌道（この場合は天体の周期的な運動）となることがわかる。

一步進んで3つの天体の運動（3体問題）を考えると、解の挙動は複雑になり代数的な手法だけでは手に負えなくなる。例えば周期軌道がどのくらいあるかも難しい問題である。19世紀から20世紀にかけ、ポアンカレは幾何学的な視点から3体問題を研究し、そこから2次元円環（2つの円で囲まれたドーナツのような図形）上で定義されるツイスト写像というシステムを見出した。ツイスト写像に関してポアンカレが述べたある定理（証明

は後にバーコフが与えた）の帰結として、ツイスト写像は無数個の周期軌道を持つことがわかる。

約10年前に共同研究者と私が証明した定理の帰結として、「大抵の」ツイスト写像は周期軌道を（ある範囲に）「ぎっしり」持つということがわかる（正確に述べるには少し準備が必要である）。証明には、今世紀になってから開発された、飛び道具のような理論を使う。これはきわめて強力な理論なのだが、使える状況がかなり限られている。例えば2次元円環のかわりに4次元や6次元の図形の上で定義されたシステムを考えることもできるが、この場合に我々の定理と同様な結論が成り立つか全くわかっていない。これを解明する第一歩として、2年前に書いた論文中で、ある予想を提起した。私は難しい予想だと思っていたのだが、数ヶ月後に若手数学者のグループによりあっさり解かれてしまい、力不足を痛感した。今回の受賞を励みに今後もなんとかがんばってきたい。

「分子レベルのモノづくり」

京都大学化学研究所教授 大宮 寛久

人類の生存を維持し、生活水準を向上するために必要不可欠な物質である医薬品や機能性材料の多くは、有機分子から成り立っており、日常生活に強く結びついています。これら高い付加価値をもつ有機分子は、さまざまな形・大きさ・性質の分子をレゴブロックのように組み立てていく、分子レベルのモノづくり「有機合成」によって、生み出されてきました。しかし、これまでの伝統的な有機合成は、組み立てていく分子の形・大きさ・性質に左右されています。つまり、さまざまな種類の反応試薬を使用し、組み立てやすいように、多くの工程を経ながら、分子の形・大きさ・性質を次々と変化させ、高い付加価値をもつ有機分子をつくりだします。その結果、途轍もないコストや研究時間を要し、さらには環境に大きな負荷を与えることとなります。

近年の創薬研究は、低分子医薬品だけではなく、抗体医薬、中分子医薬、核酸医薬、細胞医薬など多様なモダ

リティの出現によって、これら構成成分である有機分子の形・大きさ・性質が、益々、複雑化・高度化しています。これまでの伝統的な有機合成を承継するだけでは、太刀打ちできなくなっています。また、新型コロナウイルスのような感染症の脅威が再び訪れ、人類を危機に陥れるかもしれません。したがって、私たち有機合成化学者は、今まさに必要とする医薬品を、地球上に豊富に存在する資源から、要求に応じて、大量かつ迅速に社会に供給する使命があります。

私たちの研究室では、環境負荷の少ない反応試薬やエネルギーを活用して、分子の形・大きさ・性質に左右されずに、高い付加価値をもつ有機分子を思い通りに組み立てていくことを目標に日々研究を行っています。そう遠くない未来、あらゆる有機分子の合成が、地球上に豊富に存在する資源からレゴブロックを組み立てるように、容易く達成できることを夢みて。

「Physician scientist として未来の医療に貢献する」

慶應義塾大学医学部教授、国立がん研究センター研究所分野長 片岡 圭亮

今回、このような榮譽ある賞をいただけたことに心より感謝申し上げます。私は、血液内科医として患者さんの診療に携わる傍らで、高速に塩基配列の決定ができる次世代シーケンス技術を用いて、白血病やリンパ腫などの血液がんを中心とした様々な悪性腫瘍（がん）に起こる遺伝子異常の解析を行ってきました。遺伝子は A, T, G, C という 4 種類の塩基が連なって出来ており、これらが傷つくことで、塩基の置換や喪失、遺伝子の数（コピー数）の変化などの遺伝子異常が起こります。がんは、このような異常が偶然に重要な遺伝子（ドライバー遺伝子）に生じることで起こる病気です。そのため、がんが引き起こされたり、治療が効かなくなったりする仕組みを解明するために、がんの持つ遺伝子異常を理解することが必要です。さらに、新たなドライバー遺伝子を見つけることで、新規の治療薬や、その効果を予測できるマーカーの開発につながります。実際に、日本においても、次世代シーケンスを用いて患者さん一人一人の腫瘍が持つ遺伝子異常を明らかにし、それに合わせた治療薬を用いる

個別化医療（がんゲノム医療）が行われています。私は、動物モデルなどを用いた実験と、プログラミングなどを用いた情報解析を組み合わせることで、このような遺伝子異常の全体像の解明から、新たな治療戦略・診断方法の開発まで行い、医学・医療に貢献することを目指してきました。

臨床現場で医師として働きながら、基礎医学研究を行い、基礎と臨床の橋渡しをする研究者は physician scientist（研究医）と呼ばれます。近年、診療のみを志向する医学生が圧倒的に多数となり、研究医が不足して日本の医学研究の将来が危ぶまれています。私が研究を続けていくことができたのは、患者さんの役に立ちたいという初心に加えて、医学研究に奥深い面白みを感じてきたからでもあります。今後も physician scientist として未来の医療に貢献することを目指しつつ、若い研究医に少しでも研究の面白さを伝えていきたいと思っています。

「言語の研究のどこがおもしろいか」

東京大学大学院人文社会系研究科准教授 長屋 尚典

人間の言語がおもしろいのはその多様性である。世界には 7,000 を超える言語が存在すると言われるが、これらの言語は、語彙はもちろん文法の点でも異なっており、それぞれが独自の特徴を持っている。そして、それを話す人々の文化や歴史、アイデンティティを支えている。

たとえば、日本語で「花奈がリンゴを食べている」と表現する内容を、フィリピン共和国で話されるタガログ語で表現すると、Kumakain ng mansanas si Hannah になる。これを無理矢理日本語に訳すと「食べている をリンゴが 花奈」というようになって、語順が日本語と正反対である。日本語もタガログ語もおおよそ同じコミュニケーション上の目的を達成しているが、それを表現する方略は全く異なっている。

子どもの時から人と違うことがしたかった私にとって、言語の研究の醍醐味は、自分のよく知らない言語について調査し、このような言語の多様性を分析し、誰も気づいていないような特徴を見つけるところにある。

たとえば、インドネシア共和国で話されるラマホロッ

ト語では「右」や「左」のような相対的な空間概念を用いて事物の位置を表現できない。日本語なら「男は木の左に立っている」と言えるが、この言語には「右」も「左」もないのである。そのかわりに「山」や「海」といったランドマークを利用して「男は木から見て山の方に立っている」のような言い方をする。そんなラマホロット語の特徴を見つけたときはとても愉快だった。

しかし、言語の研究のもっとおもしろいところは、その多様性の中に共通点を見いだすことができるところである。上記のように異なる日本語もタガログ語もラマホロット語も、たとえば、談話の主題の出現位置だとか親族名詞の使い方だとかにおいては非常に似ている。そして、それには理由がある。そんな共通点を見つけ、その理由を探求することもまた言語研究の醍醐味である。

今後もそのような言語の多様性と共通点をめぐって言語の研究を続けたい。それを通して人間とは何かについて少しでも理解したいと考えている。

「未知を求めて植物を研究する」

東京大学大学院農学生命科学研究科准教授 藤井 壮太

私は家庭の都合で小～中学生の一定期間をアメリカで過ごしました。その後の学業生活も、寮生活や一人暮らしを経て、およそ定住とは無縁の生活でした。研究者としてのキャリアでも、国内外含め5箇所の研究組織を渡り歩いて現職に至りました。そのため、私の生活では身近なロールモデルがない時期も多く、「わからない」ことがデフォルトでした。

そのような背景からか、私はできるだけ人類にとって未知で、かつ自分が手をつけなければ理解が進まないと思われるものを研究課題として選択するように心がけています。「植物の研究者」は生物学の中ではおそらくマイノリティです。そして「植物の生殖」は植物研究のレパートリーの中でもマイナーな一分野です。さらに、ある植物種Aの花粉を異なる植物種Bの雌しべにかけることで何か新しい原理を発見できる、と真剣に仮説立てた研究者は科学の歴史上ごく少数しかいないと思います。しかし、私はそのような異種交雑によって植物を敢えて

「揺さぶる」ことで、これまでの生物学において未知の原理が発見できると期待して、2011年から研究材料となる植物の収集を始めました。多様な植物群を育てながら手探りで交配実験を繰り返し、植物の雌しべには受精前障壁があり他の種の花粉を排除する機能があることを再確認しました。その研究の結果として植物の生殖を司る新規の細胞膜タンパク質、転写制御因子や分泌ペプチドを発見できたことは幸運でしたが、今回このように栄誉ある賞をいただけたことはさらなる望外でした。

生物学では原子と原子の間の相互作用の次元で理解が進んだ分野もありますが、教科書に載っていない物質や性状未知の分子が未だ多数存在します。現代には実生活に不可欠なほどに優秀な人工知能がありますが、まだまだ手探り探索が必要な時代でもあります。未知は最高の教材です。今後も未踏分野の探求に拘り、研究と教育を進めます。

「制度設計と情報設計の理論およびオークションや市場・組織分析への応用」

大阪大学大学院国際公共政策研究科教授 山下 拓朗

私の研究分野は、経済学の中でメカニズム・デザイン理論と呼ばれます。制度やルール設計に関する理論です。

人々は様々なルールのもと、社会・経済活動を行います。物の売買、労働、投資、婚姻、SNSのプライバシー・ポリシーや子どもへのお小遣いの約束にいたるまで、様々なルールがあります。人が集まればそこにルールが現れる、と言ってもいいほどです。

なぜこのようなルールが存在するのでしょうか。ルールを変えると人々の行動はどう変化するのでしょうか。よりよいルールはあるのでしょうか。制度設計の理論はこのような問いに答える、あるいは完全な解答は難しくともよりよいルールについての含意を得ることを目的としています。

例えば、ある施設を利用したいグループが複数いる中、施設管理者のあなたが「施設を最も必要とするグループを選定したい」と思っていたとして、どのような手順で選定を行うのがよいでしょうか。具体的な状況や物理的な制約によっても答えは変わりますが、ひとつ重要な点として、もしもあなたが各グループのことについてすべ

て余すところなく知っているとき、実はルールは必要ないということです。施設を最も必要とするグループは、あなたにとって明らかなはずだからです。

逆に言えば、各グループについての情報が不足しているときこそ、ルールは重要になります。ルールに従って各グループがどうふるまうか（例えばどんな申請書類を提出するか）を見ることで、彼らの「施設への必要性の高さ」を判断していくのです。つまりルールの設計とは「得られる情報の設計」でもあるのです。

反対に、施設管理者のあなただけが特別な情報を知っていることもあるでしょう。どんな情報を与えるべきかという問題も、ルール設計の問題のひとつだと考えることができますし、より一般に、ルール設計の理論とは情報のやり取り・コミュニケーションについての理論とも言えるかと思います。SNSやAIなど、コミュニケーション手段は日々変化しています。その中で理論がどのように今後発展していくのか、注目したいと同時に、その発展に自分も少しでも寄与できるよう精進したいところです。

日本学士院学術奨励賞・日本学術振興会賞授賞式（令和6年3月7日）



佐々木 毅院長の式辞



渡辺 浩選考委員会委員長の審査経過報告



受賞者を代表して挨拶を行う入江 慶氏



式後、受賞者と懇談する秋篠宮皇嗣同妃両殿下

新会員選定

令和5年12月12日開催の第1174回総会において、日本学士院法第3条に基づき、次の7名を新たに日本学士院会員として選定しました。（現職は選定時）



川人 貞史（かわと さだふみ）

第1部第2分科

専門分野：政治学・政治過程論

現職：東京大学名誉教授、東北大学
名誉教授

計量的実証的な研究手法を用いて、日本・米国などの選挙・政党・議会について、優れた研究成果を次々に挙げている。データ収集の網羅性と、データの巧みな数量的分析による事実の発見と説明の明快さは卓越している。



岩原 紳作（いわはら しんさく）

第1部第2分科

専門分野：商法

現職：東京大学名誉教授、早稲田大学
名誉教授

会社法および金融法の分野において、一方では情報技術の発展、他方では高度経済成長の終焉とバブル崩壊等の事情により日本が直面した課題の解決について、理論的基礎を提供し、かつあるべき制度改革の方向性を示す役割を果たした。



佐和 隆光 (さわ たかみつ)
 第1部第3分科
 専門分野：計量経済学・環境経済学
 現職：京都大学名誉教授、滋賀大学名誉教授、国立情報学研究所名誉教授

計量経済分析の基礎となる同時方程式モデルにおける各種推定量の小標本特性の解明において多大なる画期的業績を挙げた。また経済学の方法、経済思想、日本経済の分析等の分野で数多くの著書及び論考を発表し多くの読者を得た。環境問題とくに気候変動緩和策の提言を先駆的かつ積極的に行った。



八田 達夫 (はった たつお)
 第1部第3分科
 専門分野：公共経済学
 現職：アジア成長研究所理事長、大阪大学名誉教授、政策研究大学院大学名誉教授

価格の歪み縮小の厚生効果の分析など厚生経済学を中心とする理論研究において国際的に業績を上げる一方、市場の失敗に起因する日本経済特有の政策課題（都市政策、住宅政策等）を厚生経済学に基づいて分析し、数多くの法改正に経済学的根拠を与えた。



香取 秀俊 (かとり ひでとし)
 第2部第4分科
 専門分野：量子エレクトロニクス
 現職：東京大学大学院工学系研究科教授、理化学研究所光量子工学研究センター時空間エンジニアリング研究チーム チームリーダー、理化学研究所香取量子計測研究室招聘主任研究員、科学技術振興機構未来社会創造事業プログラムマネージャー

レーザー光の干渉で作られた光格子に多数の原子を捕獲し観測することで、ドップラー効果と量子雑音を低減し、現在使われている原子時計を千倍程度上回る18桁の精度を持つ光格子時計を提案し実現した。



岡田 恒男 (おかだ つねお)
 第2部第5分科
 専門分野：建築学・耐震工学
 現職：東京大学名誉教授、日本建築防災協会顧問

建築物の耐震性能を一貫して表現できる指標 (Is 値) を開発し、これ

により既存建築物の耐震診断法、耐震補強のための耐震改修方法などが急速に推進され、日本を始め多くの震災国での地震対策に採用されている。



白土 博樹 (しらと ひろき)
 第2部第7分科
 専門分野：医学・医理工学
 現職：北海道大学大学院医学研究院教授、北海道大学大学院医学研究院医理工学グローバルセンター教授、北海道大学ディスティングイッシュトプロフェッサー

放射線科学の分野において、体内で呼吸などで動くがんへ空間的・時間的精度を高めた4次元放射線治療という新分野を開拓し、高精度放射線治療装置と関連技術の世界的な普及と患者への還元に貢献した。

新客員選定

令和6年3月12日、日本学士院法第6条に基づき、わが国における学術の発達に関し特別に功労のあった外国人としてミシェル・ザンク氏を新たに日本学士院客員に選定しました。



ミシェル・ザンク (Michel ZINK)
 フランス学士院アカデミー・フランセーズ会員、同碑文・美文アカデミー名誉終身書記、コレージュ・ド・フランス名誉教授
 国・地域名 フランス
 専攻学科目 中世フランス文学

ミシェル・ザンク教授は、中世フランス文学の分野で若くして多大な業績をあげ、教育者としてもパリ大学、コレージュ・ド・フランス（中世フランス文学講座）などフランス最高学府にその教育の足跡を残した。専門

の中世フランス文学の分野においては、著書、論文併せて486点という膨大な著作を著し斯学の発展に貢献するとともに、中世フランス文学の数多くの作品を、当時の社会の諸構造と結びつけ、新たな視点から再解釈して、旧来の中世フランス文学観を一新した。またイェール大学、カリフォルニア大学、コロンビア大学など米国を代表する諸大学で講義を担当した。フランス国内では2000年に碑文・美文アカデミー会員となり、2011年から2022年までは同アカデミーの終身書記を務め、また2017年にはアカデミー・フランセーズ会員にも選ばれた。このような卓越した学術・教育の成果と長年にわたる学界への優れた貢献に対して、2007年に人文科学分野の顕彰として最高のバルザン賞を与えられた。フランス国内では累次にわたりレジョン・ドヌール勲章を、また我が国の学術への貢献を認められ2019年に旭日重光章を受勲した。

講演会レポート

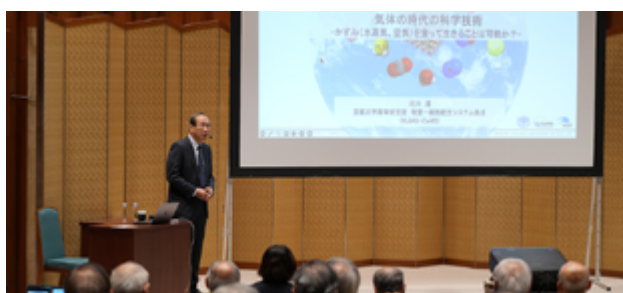
本院主催により、以下の講演会を開催しました。

1. 第76回公開講演会

開催日 令和5年10月28日(土)

会場 日本学士院会館(会場・オンライン)

西村和雄会員(神戸大学計算社会科学研究所センター特命教授)が「基本的モラルと社会的成功—正直者は損をするのか?」、北川進会員(京都大学高等研究院副院長・特別教授)が「気体の時代の科学技術—かすみ(水蒸気、空気)を食って生きることは可能か?—」と題して講演を行いました。



(上) 西村和雄会員、(下) 北川進会員

2. 第15回学びのススメシリーズ講演会

「物語を彩る「キャラクター」と「役割語」

開催日 令和5年12月16日(土)

会場 日本学士院会館(会場・オンライン)

金水敏会員(放送大学大阪学習センター所長、大阪大学名誉教授)が、自身が命名した「役割語」(「そうじゃ、ワシは知っておるんじゃ」のように人物像から連想される話し方)について、近代小説やアニメ作品を例に用いて解説しました。また、物語における《キャラクター》(登場人物の属性面)と《人格》(登場人物の心や魂に当たるシンボル)という枠組みを使い、最近のアニメ映画を題材に具体的な分析を行いました。



金水敏会員

3. カール・ヘンリク・ヘルディン客員来日記念講演会

開催日 令和6年1月12日(金)

会場 日本学士院会館(オンライン)

ヘルディン客員(ウプサラ大学分子細胞生物学教授、前ノーベル財団理事長)が「がん研究—ノーベル賞からのインスピレーション」と題し、前半はノーベル財団理事長としての経験を踏まえ、ノーベル賞の歴史を紹介し、後半はヘルディン客員の専門のがん研究について、自身の研究成果も交えながら、なぜ、どのようにして人はがんを発症し、どのように治療されるのか、わかりやすく解説しました。



ヘルディン客員

(会員寄稿)

『古代ラテン語集成』とその オープンアクセス化

松浦 純 会員
(ドイツ文学専攻)

ラテン語は、もともとは、ローマを首都とするラティウム地域に居住していた人々つまり後のローマ人の言語でした。ローマが版図を広げ地中海世界を統一する大帝國へと発展するのにともなって、その世界の共通語となります。そしてローマ帝国の崩壊（西ローマ帝国滅亡476年）後も、イタリア語・フランス語・スペイン語などのロマンス系諸語の元となる一方、古典古代文化を直接伝える言語として、また西方キリスト教会の言語として、西ヨーロッパ世界の宗教、法、行政、学術などの共通語となり、「(西)ヨーロッパ世界」のまとまりを支える要となりました。その現代に続く直接の影響は、ロマンス系諸語はもちろんのこと英語にもラテン語起源の語彙が非常に多くある、といった点にまず見られます。しかしそれだけではありません。ドイツ語のような別の系統(ゲルマン系)に属するヨーロッパ言語の語彙や文法も、言語史の最初期に広範にラテン語に倣って形成された部分があって、「外来語」としての単語の流入などよりずっと深いレベルで、ラテン語が言語体系を規定しているのです。永らく学術言語として機能してきたことが、学名などにラテン語やラテン語式の造語が用いられることに現われているのは、言うまでもありません。ラテン語の語彙に少しでも触れることは、英語などだけでなく、さまざまな学名にも、また一味違った親しみを与えてくれるかもしれません。

『古代ラテン語集成』(Thesaurus Linguae Latinae 略称 TLL) は、古風に直訳すれば『羅句語之寶庫』あるいは『羅句語寶物庫』といったところですが、西暦紀元600年頃までのラテン語語彙を網羅的に収録し用例とともに記述して語義の展開を詳しく示す、記念碑的大辞典です。紀元600年頃までということは、資料として、いわゆる古典期だけではなく、古代末期に至るまでのもの、したがってまたアウグスティヌスをはじめとするキリスト教古代教会の教父たちの著作も含まれる、ということです。それ以外にも、法律文書、医学文献、碑文、さらにはレシビなども含まれます。圧倒的な規模だけでなくこういったテキストタイプの包括性も、おもにキケロなど古典期の代表的文人のテキストを資料としていた19世紀までのラテン語辞典に対して画期的な点です。項目記述・編纂の基盤には、1000万枚に及ぶ用例・註釈カードの蓄積があり、各項目は執筆者・編集者・編纂主幹による何段階もの検討・確認を経てはじめて完成します。ブリタ

昭和24年愛知県生まれ。東京大学教養学部教養学科卒業、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。東京大学文学部助手、東京都立大学人文学部講師・助教授、東京大学文学部助教授・大学院人文社会系研究科教授等を歴任。フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞、恩賜賞・日本学士院賞等を受賞。



ニカ百科事典が“dictionary”の項で次のように記していることも、国際的評価を端的に示すものと言えるでしょう。“Probably the most scholarly dictionary in the world is the Thesaurus Linguae Latinae.”

編纂は、1894年、前年のベルリン、ゲッティンゲン、ライプツィヒ、ミュンヘン、ウイーン五学士院の決定によって開始され、編纂所がミュンヘン(バイエルン学士院)に置かれました。第1分冊(a-abutor)の刊行は1900年でした。それを皮切りに刊行が続けられてゆきますが、2次にわたる世界大戦の破局を経て、1949年、編纂事業は国際事業として再出発し、バイエルン学士院に引き置き置かれつつ、ドイツ語圏諸学士院に加えて諸国の学士院・学術団体の国際協力を得て運営されることとなりました。参画機関はドイツの諸学士院(現在8院)を別にして原則的に各国一つとされており、現在は29か国38の学士院・学術団体(国際学術団体を含む)が加わっています。日本学士院は1987年に参加して現在に至りますが、欧米系諸国以外からはほぼ唯一の参加です。編纂作業には、現在20人余りの研究者があたっており、辞典項目執筆者の総計はこれまで390人近くに上っているということで、そのうち3人が日本の研究者です。

事業の歴史と概要、組織等については、本院の『古代ラテン語集成案内』(1989 - https://www.japan-acad.go.jp/pdf/activities/TLL_brochure1989.pdf)をご覧ください。包括的な最新の紹介はバイエルン学士院ホームページにあります(<https://thesaurus.badw.de/das-projekt.html> [ドイツ語]、<https://thesaurus.badw.de/en/project.html> [英語])。既刊の辞典項目は、A-M, n-netura, O-P, r-resurgo、および固有名詞篇(Onomasticon) C-D(こちらの続刊は予定されていない)です。このうち、刊行3年未満の部分以外は、pdfファイル形式(項目検索可能)で無料でオンライン利用できます(<https://thesaurus.badw.de/tll-digital/tll-open-access.html>)。

2019年に実現したこのオープンアクセスによって、古代ラテン語の最大・最良の辞典が自由に使えるようになったわけです。西洋古典学はもちろんのこと、西洋語学文学、西洋史学、西洋思想史・芸術史などの各分野にとって、またそれ以外でもラテン語語彙について調べたい場合に、たいへん大きな朗報です。日本学士院も協力しているこの辞典がわが国でも広く知られ、大いに活用されることを、国際協力委員会委員として期待しているところです。

(会員寄稿)

学士院紀要 100 巻記念によせて

柏原 正樹 会員
(数学専攻)

日本学士院紀要出版 100 巻記念にあたり、学士院会員のなかで日本学士院紀要への投稿数がとりわけ多い (25 編) とのことで、寄稿の依頼を受けましたので、書いています。ただ、誤解のないように申し添えますと、私の投稿したのは Series A で 1 編 6 頁以内と短いものです。

ご承知のように、学士院紀要は Series A と Series B とに分かれており、その性格はこの二つでかなり異なります。Series A は数学の論文の出版に特化されており、さらに一論文の頁数も 6 頁が上限と制限されています。これは、Series A が速報誌の性格を持っているからです。

フランス科学アカデミーの紀要 Comptes rendus de l'Académie des sciences も同様に速報誌の性格を持っており、頁制限こそありませんが 10 頁以内が推奨されています。

一昔前までは、数学の分野においては、投稿してから出版されるまで数年かかることも珍しくありませんでした。そこで、速報誌に結果のみを投稿して、世界に情報発信することに大きな意義がありました。詳しい結果は、証明をつけて、別に原著論文で発表するという型式です。数学の論文では、証明が重要視されます。通常の学術誌に載る数学論文としては、結果だけを書いた論文、予想だけを書いた論文等々などは論外とされています。

このような意味で、学士院紀要のように結果だけを公表できる速報誌は、特に数学において大きな意義があります。しかし、世界的にみても速報誌の数は多くありません。

さて、私が学士院紀要に投稿するようになったのには、恩師佐藤幹夫先生 (1926 - 2023) の影響が大きかったと思います。佐藤先生、河合隆裕氏とともに、1970 年代に超局所解析の共同研究に邁進していましたが、その成果を学士院紀要に速報の形で何度も発表しました。この頃は、3 人の共同研究も急速に進展し、原著論文を書く暇も惜しいくらいの状態でしたので、学士院紀要の速報によって成果を公表するという恩恵に浴したことは非常

昭和 22 年茨城県生まれ。東京大学理学部数学科卒業。名古屋大学理学部助教授、京都大学数理解析研究所教授・所長、同大学高等研究院特定教授、国際数学連合副総裁等を歴任。

平成 19 年より日本学士院会員。朝日賞、日本学士院賞、藤原賞、チャーン賞、京都賞、瑞宝重光章、京都府文化賞特別功労賞等を受賞・受章。現在 Proceedings of the Japan Academy, Ser. A の Executive Editor。



に有難いことでした。

今からふりかえると、佐藤先生は、そのころ学士院会員であられた彌永昌吉先生 (1906 - 2006) から紀要への投稿を勧められていたという事情があったのではないかと推測しています。

その後も、折にふれ、紀要にしばしば投稿しています。そのほとんどは、速報の形での投稿で、結果のみを報告し、詳細は、別に出版するというものでした。なかでも、Pierre Schapira 氏との共著で掲載した、層の超局所解析に関する論文 2 編は、これまでの解析学から幾何の性質を抜き出すことに成功した結果で、いまも表現論やシンプレクティック幾何学などに影響を与えています。その詳しい結果を書いた論文は、学術誌に掲載するには長すぎたので本の形にまとめて発表しました。

実は、学士院紀要に最初に関わったのは 1968 年に遡ります。その頃、小平邦彦先生 (1915 - 1997) が、米国から東大に帰られ、複素多様体の講義をされていたのを聴講していました。小平先生は、講義の中で時々問題を出されていました。学期の最後にレポートを提出しなければならなかったのですが、出題された問題の一つが解けたので、これをレポートにまとめて提出しました。すると小平先生に電話をするように事務から連絡があり、電話をすると、証明がおもしろいので、学士院紀要にレポートの結果を書かないかということでした。(小平先生も学士院会員でした。) その当時は、まだ学部学生でもあり、英語力もつたなく、論文の書き方もよく分からぬ若僧だったので、お断りしました。しかし今になって考えるとお引き受けの方がよかったかとも思います。

インターネットによって、学術誌の出版状況も大きく変わりつつあります。arXiv のようなプレプリントサーバーもあらわれている現在、学士院紀要 Series A も、変化を迫られています。しかし、査読を行う速報誌としての存在価値は失われていないと思います。これからは、それをさらに活用、発展していくことが求められると思っています。

(会員寄稿)

『日本古貨幣目録』をめぐって

佐藤 彰一 会員
(西洋中世史専攻)

2019年11月25日から29日にかけて、パリのフランス学士院を会場にして、国際学士院連合(UAI)第90回総会が開催された。この会は同時にUAI創立100周年を祝賀する会でもあった。この記念すべき総会で、日本学士院が提出していた新しい学術プロジェクト「日本古貨幣目録」が、94番目のプロジェクトとして採択された。この新プロジェクトの構想は、それを遡ること数年、学術先進国である日本の学術プロジェクトが、第7プロジェクトの「在外日本関係史料翻刻と翻訳 Unpublished historical documents relating to Japan in foreign countries」だけというのはいかにも淋しい、ついには何か新しいプロジェクトを立ち上げて欲しいというUAI事務局の意向を受けて、いろいろ模索した結果、今の日本の人文科学分野で他国(主に欧米)の斯界での学術動向に鑑みて、我が国において一段の推進を必要とする分野が何かを考えたとき、浮上してきたのが「貨幣学(古銭学) numismatics」の分野であった。

筆者が専門としている歴史学(西洋中世史)は、この学問を遂行する上での知識と専門技術を教授する個別の分野として、特に古い時代に関しては考古学、碑文(金石文)学、中世や近世に関しては史料学(これは更に古書体学、文書形式学等々の細目分野に分かれている)など古記録を正確に解読するのに必要な、かつては「補助科学」と称された個別の研究領域が存在するが、このなかで欧米の先進国で盛んでありながら、日本では近年にいたるまで比較的等閑に付されている分野がある。それが「貨幣学」である。

日本における貨幣の歴史については、第一分科の同僚である東野治之氏が著した『貨幣の日本史』(朝日選書1997年)と題する、タイトルが示すような日本貨幣の歴史についての優れた概説があるものの、モノとしての貨幣それ自体の探究、すなわち「貨幣学(ニューミズマティクス)」の体系を論じた著作ではない。著者もそのような著作として執筆する意図はなかったであろうと推察する。この書物のなかで縷々説かれているように、古銭に対する人々の関心は高く、とりわけ江戸時代には古銭の蒐集家の交流が盛んで希少な銭貨の売買や交換、古銭についての情報交換が盛んで、そうしたなかで蒐集家大名

昭和20年山形県生まれ。

中央大学法学部法律学科卒業、早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。愛知大学法経学部助教授、名古屋大学文学部・大学院文学研究科教授等を経て、平成21年より日本学士院会員、平成31年よりフランス美文・碑文アカデミー外国人会員。令和元年より国際学士院連合副会長を務める。



として名を馳せたのが福知山藩主朽木昌綱であった。彼のコレクションは、現在大英博物館とオクスフォード大学のアシュモリアン博物館に収蔵されていると承知しているが、朽木昌綱に代表される江戸期の古銭蒐集家の執筆活動も旺盛であった。しかしながら、明治期に入り東京帝国大学の史学科の創設と、そこでの教育において、先ほど申した歴史学の「補助科学」すなわち古書体学(我が国では古筆学とも称される)や文書学の教育はカリキュラムの一環として整備されたものの、古銭の学問「貨幣学」はついぞ正式の「補助科学」として採用されることはなかった。その理由は幾つか考えられるが、そのひとつに古貨幣が趣味と実益に関わっていて、明治の研究・教育者たちは、そうした分野と学術研究が接点をもつことへの忌避感があったのではないかとと思われる。

翻って欧米の歴史研究の分野では、歴史史料としての古貨幣は非破壊検査技術の発達のおかげもあって、貴金属の含有量の変動などの調査などを通じて、経済史研究の重要な素材となっており、また貴金属の地理的由来を通じて、グローバルな経済活動を解き明かすためになくはない情報を提供してくれる。また金か銀か素材の異なる貨幣の交換比率の確定によって、所与の時代の異なる経済圏どうしのリンクの様相も知ることができ。このようにモノを基盤とする歴史研究にとって、「貨幣学」的アプローチは今やなくてはならない分野になっているのである。我が国の大学で「ニューミズマティクス」が正式な授業科目になっている例を、私は寡聞にして知らない。経済史の授業のなかで、「貨幣」現象に触れられることはあっても、体系的な知識の教授が行われている例はないのではないかと推測している。

だが、近年になって少しずつ「貨幣学」分野への関心を強め、これに取り組んでいる研究者の姿が日本史、東洋史、西洋史いずれの分野でも見られるようになった。そうした機運をさらに盛り上げるために、日本古貨幣の目録を作る作業は、この学問の足場を固める上で重要であるという認識に立って、UAI事務局の要請もあり、正式の新学術プロジェクトとして申請し、先に述べたように2019年11月の総会で第94プロジェクトとして採択された次第である。

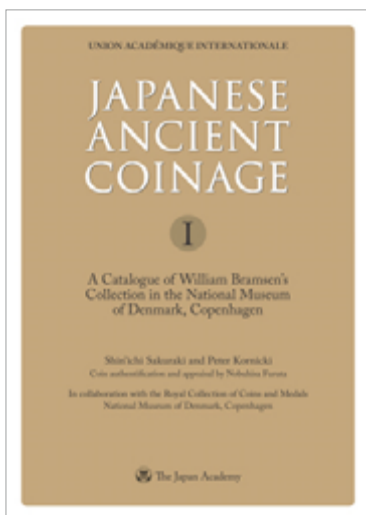
＊

新プロジェクト申請にあたっては、これに先立つ数年間を予備調査に当てた。日本貨幣のコレクションを持つ西宮市にある「黒川古文化研究所」、佐倉市にある「国立歴史民俗博物館」、名古屋市にある三菱UFJ銀行（旧東海銀行貨幣コレクション）、東京大学経済学部所蔵日本貨幣コレクションなどを、事務室の竹内基樹さんと共に視察し、当該機関の専門家と意見交換し、その多くの方々に「日本古貨幣目録諮問委員会」のメンバーになって頂いた。プロジェクトの展開戦略として、最初からあまりに大規模なコレクションと取り組むよりは、具体的な成果を比較的挙げやすい、海外の日本古貨幣の目録を対象にするのが妥当であると考え、大英博物館所蔵日本貨幣目録の作成に参加した実績があり、ケンブリッジ大学に留学し彼の地の古銭学者に知己が多い櫻木晋一氏（現在、朝日大学教授）に実務の責任者をお願いした。

櫻木教授は早い段階で最初の目録作成の対象として、明治期に「お雇い外国人」として来日して、日本の古代史研究に画期的な功績を残し、かつ優れた日本古貨幣蒐集家でもあったウィリアム・ブラムセンが残し、現在コペンハーゲンにあるデンマーク国立博物館に収蔵されているコレクションの目録作成を考えていたようである。デンマーク側および共同執筆者のピーター・コーニッキー、ケンブリッジ大学名誉教授の熱意ある協力のおかげもあって、作業は順調に進み、全編英文による『Japanese Ancient Coinage vol. 1, A Catalogue of William Bramsen's Collection in the National Museum of Denmark, Copenhagen』が2023年6月に刊行された。

出版元をどこにするかで思い悩んだ末に、筆者が現役時代に2期にわたりCOEプロジェクトの責任者を務めた折に、国際研究集会のプロシーディングをはじめとする種々の印刷物の作成を通じて、その優れた造本センスとサンスクリット語やチベット語を含め多言語印刷に秀でた能力を持つ名古屋の出版社「あるむ」をお願いする

ことにした。こうして完成したカタログの出来栄は、自画自賛とのお叱りの言葉を受けるのを承知のうえであえて言うならば、見事な完成度を示していた。表紙の基調になっている金色は、黒を含めた四色分解で行うカラー印刷の色彩調整のなかでも最も難し



い作業とされているが、金色の色感を絶妙に実現し、大文字のみのフォントであるトロイ書体の採用と相まって重厚ななかにも、「黄金の国ジパング」の貨幣コレクションであることを的確に伝え、角型背表紙の採用もあって、瀟洒な風格を具えている。無論、櫻木晋一、ピーター・コーニッキー両氏の手になるカタログ本文、解説も非常に充実した内容であり、献上した海外の識者や専門家から過分な賞賛の言葉を忝くした。

本カタログへの評価の高さは、これによって両著者がデンマーク国立博物館賞を受賞したことにも表れている。このカタログ出版によって、我が国の古貨幣研究者、好事家の皆さんに、ブラムセン・コレクションの内実が初めて明らかにされ、ブラムセンの蒐集家としての眼力の確かさと、コレクションの質の高さに驚嘆した専門家もおられるということである。加えて著者のひとり櫻木教授は、ロンドンの由緒ある王立古貨幣協会（The Royal Numismatic Society）の2023年の同協会メダルの受賞者となった。このメダルは世界で古貨幣研究に顕著な功績があった人物ひとりに与えられるもので、日本人で初めての受賞であった。評価された功績のなかには数年前に同教授が参加した『大英博物館所蔵日本貨幣カタログ』編集への貢献もあったであろうが、決定的であったのはブラムセン・コレクションのカタログ編集であったことは、時期的な符合から容易に推測できることである。

＊

私どもの次の作業は「日本古貨幣カタログ」第2巻の作成であるが、これについては対象がほぼ確定している。フランス国立図書館貨幣・賞牌部門が所蔵している日本古貨幣のカタログ作成である。これを実現するための最大の懸案は、カタログ作成の費用をどう捻出するかである。

ブラムセン・カタログの場合もそうであったが、調査のための研究・旅行費用は、日本学術振興会との共同事業による委託費と、櫻木教授個人が獲得している各種の研究費で賄われた。カタログ作成は上記日本学術振興会の委託費が充てられた。しかし、日本学術振興会からの委託費はブラムセン・カタログの出版費用で終わり、第2巻の出版費用については、当面目処は立っていない。櫻木教授の話では、フランス国立図書館所蔵の日本古貨幣に関しては、以前から調査を行っており、かなりの段階までデータ整理を済ませており、出版の道筋が見えているとのことである。残るはフランス側が高水準で古貨幣の写真撮影をしてくれることと、カタログの出版の費用問題である。

諸方に費用獲得のための努力をする所存ではありますが、「日本古貨幣カタログ」プロジェクトの推進と、我が国におけるこの分野の発展にご賛同いただける皆様にご協力頂ければ洵に有難く存じます。

会員・客員の逝去

次の方々が逝去されました。

興膳 宏 会員 令和5年10月16日 享年87歳
(第1分科・中国文学専攻)

別府輝彦 会員 令和5年11月10日 享年89歳
(第6分科・応用微生物学・発酵学専攻)

エマニュエル・ル・ロワ・ラドゥリ客員
令和5年11月22日 享年94歳 (歴史学・フランス)

会員の近刊紹介

東野治之『法隆寺と聖徳太子 一四〇〇年の史実と信仰』岩波書店、令和5年11月

東野治之『史料学散策』雄山閣、令和5年12月

小田部胤久、宮下規久朗『西洋の美学・美術史』放送大学教育振興会、令和6年3月

樋口陽一『戦後憲法史と並走して 学問・大学・環海往還』岩波書店、令和6年3月

佐藤幸治『現代立憲主義と人権の意義』有斐閣、令和5年11月

渡辺 浩『日本思想史と現在』筑摩書房(筑摩選書)、令和6年1月

中山信弘『特許法第5版』弘文堂(法律学講座双書)、令和5年11月

伊藤 眞『民事訴訟法第8版』有斐閣、令和5年12月

伊藤 眞『消費者裁判手続特例法[第3版]』令和6年3月

伊藤 眞、多比羅 誠、須藤 英章(編集代表)『コンパクト倒産・再生再編六法2024一判例付き』民事法研究会、令和6年3月

深谷賢治『双曲幾何 現代数学への入門 新装版』岩波書店、令和6年1月

訂正

第32号(令和4年10月発行)11ページにおいて、田代和生会員の出身地を「東京都」といたしました。正しくは「北海道」でした。お詫びして訂正いたします。

編集後記

第33号ニュースレターでは、令和6年度日本学士院賞受賞者及び新会員と第20回日本学士院学術奨励賞、新会員選定、新客員選定の寄稿のほか、会員寄稿などを掲載しています。

ご寄稿いただきました先生方には心より御礼申し上げます。

去る3月7日、秋篠宮皇嗣同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、第20回日本学術振興会賞並びに日本学士院学術奨励賞授賞式が挙行されました。式典は、学士院会館が工事のため、今回は明治記念館で開催されました。

昨年度は、日本学士院において、一般の方を対象とした「公開講演会」や、学生や一般の方を対象とした「学びのススメシリーズ講演会」、また、「客員選定記念講演会」を実施し、首都圏はもとより遠方の方にも多数御参加いただき、オンラインでも好評をいただきました。御参加いただいた方には、感謝申し上げます。

来る5月25日には奈良での公開講演会を、昨年度と同様の会場とオンライン併用で予定しています。先着順でございしますが、多くの方に御参加いただければ幸いです。

今後とも、オンラインを活用した情報提供サービスの充実や事業の推進を図っていきたく考えております。

(H)

◎お問合せ先

日本学士院

〒110-0007 東京都台東区上野公園7-32

電話：(03)3822-2101

E-mail：gkjim@mext.go.jp

第33号：発行日：令和6年4月12日

(年2回 4月、10月発行)

本院ウェブサイトではこれまでに発行した号をご覧ください。

<https://www.japan-acad.go.jp/japanese/publishing/newsletter.html>

